慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	横浜・篠原付近の生物相と露地栽培植物相（1995-2006）
Sub Title	The Flora, Fauna and the outdoor horticulturals of Egeyato, Shinohara, Yokohama(1995-2006)
Author	菅野, 徹(Sugano, Toru)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of natural science). No.41 (2007. 3) ,p.67- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20070331-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hiyoshi Review of Natural Science
Keio University No. 41, 67-85 (2007)

横浜・篠原付近の生物相と露地栽培植物相（1995-2006）

菅　野　　徹

The Flora, Fauna and the outdoor horticulturals of Egeyato, Shinohara, Yokohama (1995-2006)

Touru SUGANO

Summary—— This is a supplementary report to antecedent two notes written to the Hiyoshi Review of Natural Science, numbers 17 and 18, 1995, titled Flora and Fauna of Egeyato, Yokohama (1942-1994) and the Transition of Horticulture and Climate in Shinohara, Yokohama (1942-1994) respectively. The reporter who lives at the residence mentioned below since 1942, has wished to record every creature that he sees, hears and smells walking near his residence. Wishing to see how many lives an ordinary citizen can meet without special tools or any method of catch, he used binoculars and magnifiers only, not using light lures or any trapping. Thus the report lacks silent night animals, sneaking soil dwellers and invisible lives. Through his incessant long-term observation and efforts of identification, about 2,400 species enlisted in this report and the two preceding reports. However, an estimated total of 1,000 visible species including, fungi, spiders, small moths, dipteran, homopteran, and, hymenopteran may elude his eyes or ears because of an insufficient ability to identify. Nevertheless, this report shows the following five remarkable tendencies of a feature in the area discussed at present (Fig. 1 and Tables 1 to 3) : A. An increase in a sort of subtropical animals and plants which winter outdoors (Fig. 2) ; B. An increase in naturalized immigrant plants and their suspected ousting of native species; C. An increase in perished lives apparently because of rapid disappearance of soil substrate, that

〒222-0022　横浜市港北区篠原東3-17-3 Former-lecturer in Biology, Faculty of Economics, Keio Univ., Hiyoshi, Yokohama [Received Sept. 29, 2006]

is, the development of fields and woods into houses and parking lots; D. An increase in the conspicuous revival of once believed to be extinct animals which have been brought on by a decrease of air pollution, to some extent, during the recent years in this city; and E. An increase in horticultural alien plants introduced excessively and commercially which may someday hazard the existing outlook and eco-system of Yokohama.

Key words: flora and fauna, Yokohama, long-term.

1. はじめに

1. 身の回りに，全部で何種の，なんという名前の動植物が生きているのか？　2. 彼らの四季ごと，年ごとの変遷は，どのようなものか？　の２点だけを知りたく，筆者は，身辺生物の観察を続けてきた。筆者の興味の中心は第一に，現在もそうだが，自身が，そのサンプルに他ならぬ，ただの市民が，歩いていて目にし，耳にする動植物が，何者なのか，消え去ったのは誰で，新しく来たのは誰かということを知りたいということにあった。そのため，特別の方法や，道具は，用いず，ほとんど五感だけの観察に頼った。本報告書および文献７～13を合わせれば，少なくとも横浜市で，市民が出会える生物のほぼ全貌は捉えられていよう。なお，筆者の興味は，むしろ第二点，身辺全生物の季節変化と経年変遷の把握にあり，それらを記録した28年分のデータ，約７千ページ分が集まっているが，本意ならず未整理に終り，僅かに文献８～11に，それらの一端が発表されているに過ぎない。

2. 観察域

ＪＲ新横浜駅と東急東横線妙蓮寺駅のほぼ中間に位置する横浜市港北区篠原の自宅を中心として，自転車で，１～２時間で廻れる範囲である（図１）。東京オリンピック（1964・Ｓ39年）の頃までは，丘の上に雑木林と畑，低地に水田とそれを縫うように流れる小川，丘の裾に北を背にして農家，丘の南斜面には，モダンな住宅が，階段状に立ち並ぶ，という当時の典型的な郊外地域が拡がっていた。しかし，その後，ほとんど，あらゆる地面が，住宅とその駐車場と化し，いまや“土の”地面は，人家の庭先と，小さな公園にしか見られない。図１に示された会下谷（えげやと）の雑木林も，約10分の１の面積に削られている。癒しを求める人々は，各戸の庭を，花卉で飾り，いわば，園芸盛り，田園枯るというべき地域になっている（文献９に，年代順の変遷が，やや詳しく述べられている）

図１　横浜市港北区篠原の主観察域と付近略図。

Fig.1　Shinohara and adjacent area covering Hiyoshi campus of Keio Univ., the Port and the Tsurumigawa River, Yokohama.

3. 観察法

悪天の際を除き，自宅付近をほぼ毎日１回は，巡回し，目にし，耳にし，鼻を効かせ，感触を確かめ，味わってみるなど，五感を稼動させて，見落としのないよう努めている。専門家ではない市民が，歩いていて出会える生物の種類，行動を記録することが，主目的であるから，拡大鏡と双眼鏡と写真機以外の道具は携行しない。前の二つの道具は，五感を増幅させるためであり，カメラは，生時の色彩と，姿勢と，行動の記録のために必須である。捕虫網は用いず，bunting，sweeping，灯火誘引など，積極的な採集は行わなかった。動植物の採集は，その個体が，地域最後の１♀または，１♂である可能性を考え，原則として行わない。その場で同定困難な無脊椎動物は，管瓶で採集し，帰宅後，精査し，終われば，元の地に放つ。同定不能な幼虫は，成虫になるまで飼育している。植物は，打撃を与えない程度ならば，花や枝葉を採り，精査する。標本は，原則として作らない。飼育中に落命したものと，拾った死体は，庭に葬るが，保存したいものは，標本箱に納める。観察区域で，見聞した事象の要点は，剥せるメモ帳に現地で書き止め，帰宅後，野帳（のちょう）１ページにメモ４枚ずつ貼付する。Ａ４版主体の野帳は，1978（Ｓ53）年９月21日付けに始まり，2006（Ｈ18）年12月末現在，68冊，約7,000ページに及んでいるが，きちっと転記されずに死蔵されている。その中に，観察域28年間，約１万日，ほぼ毎日の各生物の，生死，増減，渡来，渡去，花期の長さ，などの情報が収まっているので，各生物個々の周年，経年変化の実際を把握するには，整理が喫緊の要にある。なお，同定は，市販の図鑑，ガイドブックなどによっている。それらに，あまり取り上げられぬ陸生甲殻類，トビムシ，アリ，ヒメバチ類などの膜翅目，小型双翅目などのほとんどは，同定不能であった。さらに筆者の同定能力の不足により，茸，地衣，蘚苔，羊歯，イネ科，カヤツリグサ科，ミミズ，ムカデなどの同定数は，極めて少数である。夜行性動物，土壌動物，小型甲虫，小型同翅目，小型の蜂，小型の蛾，小型のクモなども，筆者の五感に，ほとんど捕らえられていず，見ていたり，鳴き声を聞いていても，何者なのか，わからないという嘆きは，枚挙に暇ない。それら筆者の五感や，同定能をすり抜けた動植物は，この観察域だけで，おそらく千種を超えていよう。近年，オーストラリア，ニュージーランド，南アフリカなど，遠隔の地からの，園芸植物の日本への輸入が増え，それらの中には，当地域の温暖化傾向（図２）に支えられ，露地越冬するものが少なくないが，その多くが，筆者の能力を超え同定不能のまま残されている。

4. 観察期間

1942（Ｓ17）年以来，筆者は同一地点に住み，生物の観察をしていたが，1976（Ｓ51）年までは，精度，頻度，同定能，記録のどれも，極めて不十分であった。特に，たださえ少ない記録の，不注意と怠慢による散逸は，家屋が戦災を免れ，無事だったのに，大いに悔やまれる。1977（Ｓ51）年以降は，観察の精度，頻度，同定能，記録のどれもが，改善されたとみなされる。

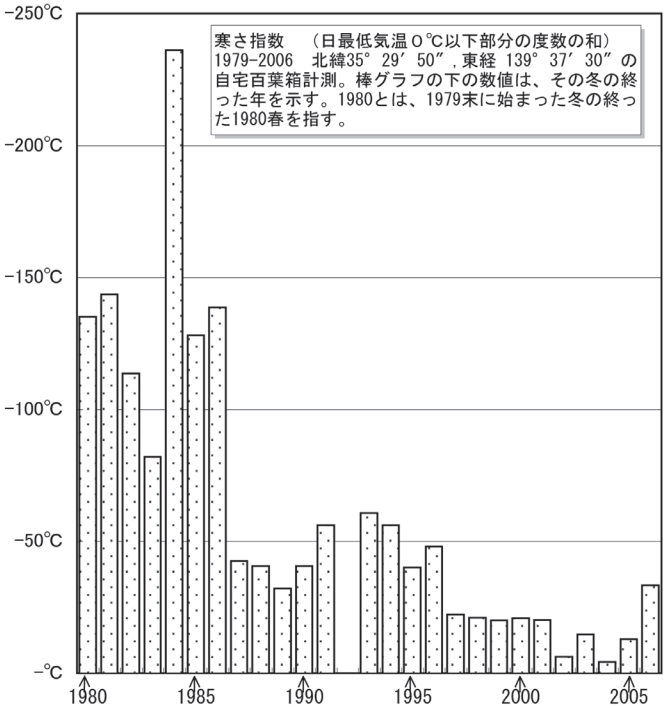

図２　横浜市港北区篠原東３での寒さ指数（1980－2006）

Fig.2　The Cold Index: the total of daily temperatures below 0℃. Dated year shown means the end of the winter season of the year. That is, 1980 means the start of winter in the preceding year 1979 to the end of the winter in the following year 1980, for example.

5. 観察結果

慶應義塾大学日吉紀要（1995）のNos. 17, 18の２号に報じた地域同定種数は，1942（Ｓ17）年～1994（Ｈ６）年の間に得られたものが約1,800種であり，今回, 1995（Ｈ７）年～2006（Ｈ18）年の間の同定は，295種，野生と露地栽培を合わせて約2,400種の動植物に，この観察区の市民は，出会えることが記録された。また，その約90％に当る約1,800種について，生時の色

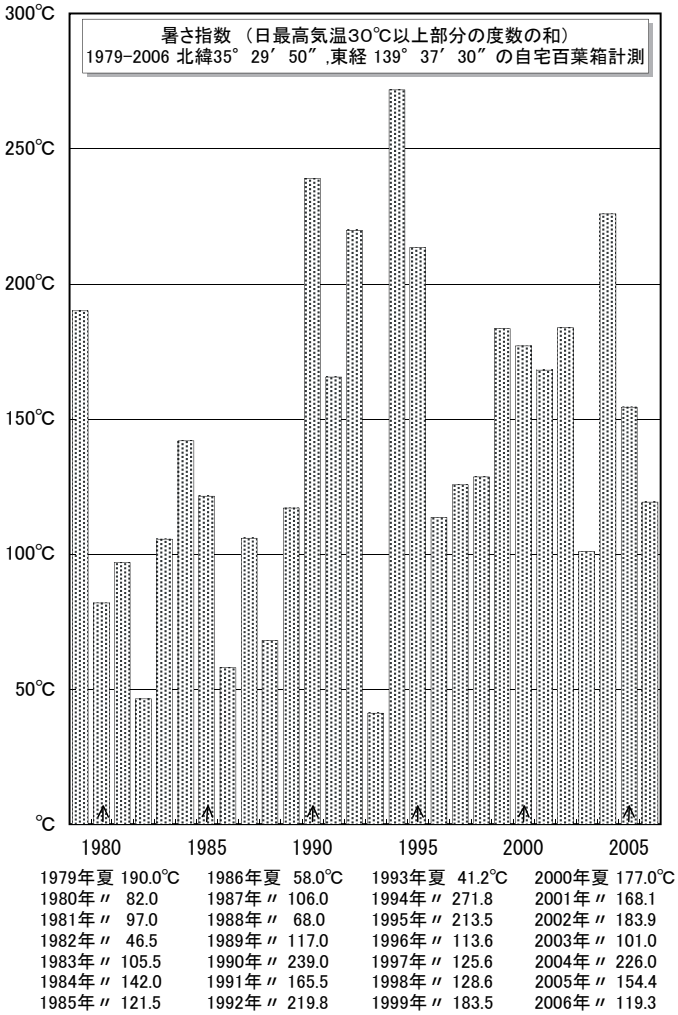

図３　横浜市港北区篠原東３での暑さ指数（1979－2006）
Fig.3　The Heat Index: the total of daily temperatures exceeding 30℃ .

彩，姿態がカラー映像に記録された。

この報告書に記録された観察期間内の現状（表１～３，図２，３）から，次の５点が，浮き彫りになった。それらは：

Ａ.

亜熱帯植物というべき耐寒性の弱い植物の露地越冬種の急激な増加。

アロエ・アルボレスケンス，同属のヴェラ，ハマユウ，ランタナなどに顕著であり，もしも，この傾向が続き，サンスベリア，クロトン，ホテイアオイ，ブーゲンヴィレアなどの，露地越冬が定着すれば，当観察区の気温状態は，亜熱帯，小笠原なみ，という状況になろう。

なお，やや南方系のツマグロヒョウモン，ナガサキアゲハは，いまや，当地域に，ごく普通に見られ，同じく南方系のアカボシゴマダラにも定着繁殖の気配がみられる。いずれも，在来の近似種との競争が懸念される。

B.

外来植物の帰化の激増と，ある程度，それによると推定される在来種の減少と絶滅。

例えば，オランダミミナグサの増加と，近似の日本在来種ミミナグサの激減もしくは絶滅。ミチタネツケの激増が，在来種タネツケバナを圧迫している可能性もある。

C.

雑木林，畠などの急激な宅地化および駐車場化による，観察域内の地面の激減が，多くの生物を絶滅，または絶滅寸前に追いやった。

ワレモコウ，アキノキリンソウ，コケリンドウ，カワラナデシコ，ナンテンハギ，リュウノウギク，ヤクシソウ，ヤマユリ，ウマノスズクサ，ヒメハギ，ヒロハカワラサイコなどに，その傾向が著しい。

D.

近年，自然環境の汚染が減少して，昆虫類などの餌が増えた可能性があるのか，一時，絶滅状態にあった動物の一部が，地域に復活した。

イエコウモリ，ジョロウグモ，カワセミ，チョウトンボなどが復活したのは，それらの絶滅を見てきた筆者には，奇跡的に思われ，非常な喜びを感ずる。

しかし，リンドウ，オトギリソウ，クマガイソウ，シュンラン，ウツボグサ，キリギリス，ウマオイ，クツワムシ，ハルゼミ，ツマグロキチョウ，ジャノメチョウ，ジャコウアゲハ，アカシジミ，ウラナミアカシジミ，ヘイケボタル，ゲンジボタル，ミドリカミキリ，ゲンゴロウ，ガムシ，コオイムシ、タガメなどには，復活の気配は，見られない。水田や，暗渠化による小川の消滅，原っぱや雑木林の激減による地面の激減は，これらの生物の復活を許すまい（文献８などに詳しい）

カケス，オオルリ，センダイムシクイ，キビタキ，コマドリ，ルリビタキ，ツツドリ，ミゾゴイ，キクイタダキ，ヤマシギ，サンコウチョウ，トラツグミ，カシラダカなどの地域への来訪は，全く絶えた。キセキレイ，セグロセキレイ，イカルなども，ほとんど全く姿を見せなくなった。地域の雑木林の激減から，彼らの再来は，期待できない（文献８などに詳しい）

E.

近年のガーデニングブームに乗じて，外来園芸植物の輸入，増殖が甚だしい。これらの，日本在来種との競合，弱者の敗北と絶滅，当地域の生物相の変化が危惧される。

表１　横浜・篠原付近の野生動物相
Table 1　A list of wild animals in Shinohara and adjacent area, Yokohama.

◇前報（慶應義塾大学日吉紀要・自然科学。Nos. 17＆18, 1995）の後，筆者自身が出会い，同定し得た種名表。伝聞は採用せず。
◇＊を付した種は，前報に記した種だが，追記の必要の生じたもの。
◇＊＊　常観察域に隣る地域での確認だが，加うべきものと考えたもの。
◇年月日を記した種は，その日にだけ出会えたもの。
◇略語解：　c　約。　CC　多い。　C　普通。　R　稀。　RR　極めて稀。
◇特記なければ，すべて，生態写真の撮影すみ。●：本報文にカラー写真添付。
◇上記のうち，地域内の野生動物として，新たに同定された種数。
Spiders 6, Decapoda 3, Insecta 43, Fishes 5, Amphibia 1, Reptiles 4, Birds 20, Mammal 1.

扁形動物門　渦虫綱　三岐腸目
コウガイビル科
＊オオミスジコウガイビル　C
節足動物門　蛛形綱　真正蜘蛛目
ハグモ科
ネコハグモ　R
ウズグモ科
マネキグモ　2004.4.28
ヒメグモ科
ハンゲツヒメグモ　2001.6.24
フクログモ科
ヒメフクログモ　R　菊名池。ヒメガマの葉を折り営巣。未撮影。
＊カバキコマチグモ　母グモは，孵化直後の子に，わが身を残らず吸わせ，抜け殻状になって死ぬ。c 1990→絶滅。
エビグモ科
ヤマトヤドカリグモ
2006.11.10（1♀）
ハエトリグモ科
アダンソンハエトリ
1999.8.29　南方系と。
甲殻綱　十脚目
ヌマエビ科
ヌカエビ　菊名池に遺存したが，c 1989→絶滅
テナガエビ科
テナガエビ　C　菊名池。
スジエビ　菊名池，c 1989→絶滅？
昆虫綱　蜻蛉目
イトトンボ科
アオモンイトトンボ（1♂）
2002.6.7
アオイトトンボ科
＊オオアオイトトンボ　c 1996→絶滅
ヤンマ科
クロスジギンヤンマ　C
ヤマトンボ科
オオヤマトンボ　R
トンボ科
フチドリベッコウトンボ
2005.8.26（1♂）本土初認純南方種。●
ヨツボシトンボ　2002.6.5　1尾，菊名池，北方系。
ネキトンボ　1995.9.18, 1997.9.27 いずれも1♂。南方系。
＊ノシメトンボ　R　c 1996→減少傾向。やや北方系といわれる。
＊コノシメトンボ　C　c 1996→増加傾向。やや南方系といわれる。
＊チョウトンボ　c 1949→絶滅したが，1988→復活。2006には，C　●
直翅目
コオロギ科
＊マツムシ　c 1949→絶滅。2003.9.12, 2004.9.1～9.26, 2005.8.29～10.12, 2006.9.7～10.12, いずれも1♂，同一地点。自然復活かどうかは？　未撮影。
キンヒバリ　c 1996→残存小湿地の宅地化により絶滅。未撮影。
革翅目
マルムネハサミムシ科
コヒゲジロハサミムシ
1996.9.23
異翅目
アメンボ科
オオアメンボ　CC　菊名池。
ハナカメムシ科
キモンクロハナカメ　1997.5.31
サシガメ科
ヨコヅナサシガメ　2006.5.25　南方系
ナガカメムシ科
ヒメジュウジナガカメ
2004.11.16
＊オオメナガカメムシ←オオメカメムシの誤植
ヘリカメムシ科
オオクモヘリカメ　R（この科の種の多くで，上翅膜質部が，みる角度によって金色に輝く。一種の構造色か。
カメムシ科
シロヘリクチブトカメ
2003.8.22　南方系
ウシカメムシ　RR　2001.5.5, 2006.10.30（幼虫）。成虫未撮影。
ミナミアオカメ　1999.8.18
同翅目
セミ科
＊ハルゼミ　1961.6.2→絶滅。未撮影。
長翅目
シリアゲムシ科
ベッコウシリアゲ　2006.6.21
鱗翅目
ヒロズコガ科
マダラマルハヒロズコガ　RR

フチドリベッコウトンボ♂　羽の差し渡し4㌢弱。2005.8.26.　この写真によって本土初認、とされた。

飛び立とうとするタマムシ，4㌢弱。2005.7.25.

ツマグロヒョウモン♀。羽の差し渡し約7㌢。花はフジバカマ。2005.10.23.

オガワコマドリ♂。雀より，やや小さい。2006.4.13

チョウトンボ♂　羽の差し渡し，雌雄とも7.5㌢ほど。2006.7.26.

チョウトンボ♀　マツモの繁茂する水面への打水産卵を終え飛び立つ。2006.7.26.

アカボシゴマダラ　羽の差し渡し約7㌢。2006.6.1.

アサギマダラ♀。羽の差し渡し9㌢弱。花はフジバカマ。2006.11.3.

ナガサキアゲハ雌雄, 左が♂。雌雄同大。羽の差し渡し約9㌢。2006.10.20.

カワセミ♂　雌雄同大，雀より，やや大きい。2006.11.17.

ビロードスズメガ終令幼虫。長さ7cm弱。眼状紋が目立つマムシ擬態。真の眼は鼻先にあり，ごく小さく，人の眼にはほとんど見えない。2006.9.7.

イエコウモリ，雀より，やや小さい。2006.11.3.

瓢箪型の蓑を被った幼虫のみ目撃。成虫は，未見。従って，成虫の生態写真は未撮影。

メイガ科

マメノメイガ　1999.10.8

タイワンウスキノメイガ　1998.10.20

シャクガ科

ナカシロオビエダシャク　1999.6.22　未撮影。

ニトベエダシャク　1999.11.19

カレハガ科

ツガカレハ　1999.8.30

スズメガ科

ウンモンスズメ　1997.7.5

コウチスズメ　2006.4.29

＊シモフリスズメ　1969.7.6　腕立て伏せの形を取り軋み音を立てた。

ドクガ科

＊ドクガ　絶滅とみていたが，2006.10.12再見。

ヤガ科

ハマユウヨトウ　2002.10.11　幼虫を見た。成虫は未撮影。

イラクサギンウワバ　2000.2.1　死体拾得。生態写真は未撮影。

ナカジロシタバ　1999.6.24

アゲハ科

ナガサキアゲハ　C　2004.10.7→急増。南方系。●

＊モンキアゲハ　1967→と訂正。C　南方系。未撮影。

シロチョウ科

＊ツマグロキチョウ　1981→事実上絶滅。1980.10.2～11.19には，計7羽を見た。1986.10.6に1羽みたのが，最後。

シジミチョウ科

＊ミズイロオナガシジミ　1996→事実上絶滅。

＊ベニシジミ　2000.1.14-1.20　夏型1羽（越冬？）

タテハチョウ科

＊クジャクチョウ　1980.10.4　時に上下翅を擦り合せシャッシャッと鳴いた。翅を擦り合せる度ごとではなく，鳴きたい時だけ鳴くようだった。鳴く蝶は，世界で日本とヒマラヤに1種ずつ，とか。

ツマグロヒョウモン　CC　2003.9.27→急増。やや南方系。●

アカボシゴマダラ　2006.6.1　南方系と。ただし人為北上説が強い。とするとBlue-gill, Blackbass，赤耳亀と似た，望ましくない侵入。●

マダラチョウ科

アサギマダラ　RR　1981.10.4, 2006.10.18（♂），2006.11.3（♀）各1羽。いずれも，新横浜駅南約1㌔付近。●

双翅目

ケバエ科

ヒメセアカケバエ　2006.4.16　1♀

鞘翅目

コガネムシ科

アオドウガネ　CC　2000→急増。

＊ウバタマムシ　1996.6.2　1尾発見，生態写真撮影。

＊タマムシ　2005.7.25の1尾　に加え，2006.8.23 1尾飛ぶのを確認。やや復活の気配？●

コメツキムシ科

ヒゲコメツキ　1998.5.12　1♂。

ホタル科

ゲンジボタル　1991.6.21　c 10尾が1細流に遺存を発見。2004　この細流の地がすべて開発され，絶滅。

テントウ科

＊コクロヒメテントウ　幼虫は，コイボウミウシに酷似。

＊フタホシテントウ　目がサファイア色。

ジュウクホシテントウ　RR

カミキリ科

ニセビロードカミキリ　2005.6.24

ハムシ科

オオキイロマルノミハムシ　1997.5.1

ジンガサハムシ　2002.5.19

ヒゲナガゾウムシ科

ウシズラヒゲナガゾウ（エゴヒゲナガゾウ）　2004.8.1

カオジロヒゲナガゾウ　2001.7.7

ゾウムシ科

＊ホソアナアキゾウ　鳥の糞の擬態。

＊ニセマツノシラホシゾウ　鳴く。カミキリ以外に鳴く甲虫の有無不明。

膜翅目

アリ科

＊アズマオオズアカアリ　誤植の訂正。

ジガバチ科

アカオビトガリアナバチ　1998.5.20

脊椎動物門　硬骨魚綱

鯉目

コイ科

コイ　CC　菊名池。

クチボソ（モツゴ）　CC　菊名池。

鱸目

サンフィッシュ科

ブラックバス　C　菊名池に帰化。

ブルーギル　CC　菊名池に帰化。

ハゼ科

ヨシノボリ　CC　菊名池に遺存。

両棲綱　無尾目

アカガエル科

ウシガエル　RR　菊名池に，戦前すでに帰化。

アマガエル科

＊アマガエル　c 1955 →絶滅していたが，2000.6.13以後，2006.6.10まで，すくなくとも7年連続で，毎年初夏，複数個体が，菊名池公園内のプールで鳴く。毎6月下旬プール営業開始とともに鳴き止む。誰かが持ち込んだものが，繁殖？

爬虫綱　亀目

カメ科

アカミミガメ　CC　菊名池に帰化。

イシガメ　c 1996→菊名池，絶滅

クサガメ　c 2005→菊名池，絶滅？

有鱗目

ヘビ科　シロマダラ　1995.9.13　目撃のみで撮影失敗。

鳥綱　鳰目

カイツブリ科

カイツブリ　1996→菊名池を去った。

ペリカン目

ウ科

カワウ　C　菊名池。

鶴目

サギ科

アオサギ　C　菊名池。

＊ミゾゴイ　1羽　1961.5.5～5.21　未撮影。

ダイサギ　1999.2.6　菊名池。

雁鴨目
ガンカモ科
マガモ　2000.10.30　1♂　菊名池。
コガモ　RR　菊名池。
オナガガモ　C　菊名池。
ハシビロガモ　1998.12.25　菊名池。
オシドリ（白化個体）1♂，籠抜け？　菊名池。2002.11.29〜2003.4.15，および2003.10.30〜2004.4.22
キンクロハジロ　CC　菊名池。1986.12.24〜以後2006年冬まで毎年越冬。
ホシハジロ　C　菊名池。
シモフリハジロ（コスズガモ）RR　菊名池。
鷲鷹目
ワシタカ科
ツミ　1♂，人家の窓に衝突したのを保護したが死。生態写真なし。
雉目
キジ科
＊＊キジ　1998年頃まで，新横浜駅北北東約8㌔の鶴見川右岸の草原で，よく見た。♂は，草原の小さなマウンドに立って，ケンケーンと鳴いた。未撮影。
鶴目
クイナ科
バン　C　菊名池。1998〜2004年の17年間，毎年育雛。
千鳥目
カモメ科
ユリカモメ　C　菊名池。
セグロカモメ　R　菊名池。
コアジサシ　1978.6.5 & 6.18，1998年6月（数回），2000.6.11〜6.20　菊名池。
シギ科
＊ヤマシギ　c 1987→絶滅？　未撮影。
鳩目
ハト科
アオバト　2001.10.30　1羽。路上に衝突死体。生態写真なし。
杜鵑目
ホトトギス科
＊カッコウ　1♂，1989.6.12　未撮影。
梟目
フクロウ科
＊アオバズク　1978.5.28〜渡来続いたが，c 1996→渡来止む。
仏法僧目
カワセミ科
＊カワセミ　c 1955→姿を見せなかったが，1995年〜菊名池に常在。●
燕雀目
セキレイ科
＊キセキレイ　2001.12.18，2004.10.9を追加。
セグロセキレイ　RR　c 1996→ほとんど見なかったが2006.10.28　1羽　菊名池。
レンジャク科
＊キレンジャク　RR　1966.4.4，1983.3.22
＊ヒレンジャク　RR　1983.3.22，1983.5.4
ヒタキ科
＊ノゴマ　1993.10.28　1♂　窓に衝突死。生態写真なし。
＊＊コルリ　1994.6.12　1♂　横浜市港北区大倉山記念館の庭で囀る。未撮影。
＊＊オガワコマドリ　1♂　横浜市港北区綱島西地先・鶴見川左岸の感潮域湿地に2005年11月頃から2006年4月末まで滞在。しきりに小声で囀る（すなわち“ぐぜる”）。●
＊＊イソヒヨドリ　1♀　1955.9.11　ＪＲ桜木町駅東南東c 150㍍の弁天橋・橋桁に止まって，嘴を開けずに，小さく囀る。雄の囀りと同じ美しい歌だった。燕雀目・雀亜目（いわゆる鳴禽類）中，雌が囀る種は，他には無いように思われる。未撮影。
＊キクイタダキ　1954.11.15〜12.4，1957.11.15　未撮影。
＊サンコウチョウ　1♂，1980.5.17　未撮影。
エナガ科
＊エナガ　1980.1.25，1987.5.1，2000.1.31〜2.11
シジュウガラ科
＊ヒガラ　1957.11.27　未撮影。
＊ヤマガラ 1996.10.10
＊シジュウガラ　1954.5.7　日野啓三と清瀬でシジュウガラを見て，横浜・篠原では冬鳥なのにと驚いている。1960年頃，留鳥化か。
ツリスガラ科
ツリスガラ（スインホーガラ）c 7羽，2000.4.8
メジロ科
＊メジロ　1985.12.26に1羽が，ジュウイチ，オオヨシキリの声を真似る。初夏の山でジュウイチを聞いてきた生き証人。
ホオジロ科
＊カシラダカ　1983.3.25　囀る。しかし，c 1996→渡来絶える。
アトリ科
＊マヒワ　5羽　1991.4.5 未撮影。
＊ウソ　1969.2.17　1羽，2006.11.22　1♂　撮影不十分。
＊コイカル　1♂　1988.4.14　未撮影。
＊シメ　1981，82，83年の4月，小さく“ツイッチ　ツリリ”と囀る。毎年，4月欅の新芽をついばんだが，c 2004→渡来ほぼ絶える。
ムクドリ科
＊コムクドリ　1羽，ムクドリの50羽ほどの群れに混じって，1988.9.9.　未撮影。
カラス科
＊＊カケス　慶應義塾日吉キャンパスの森で，2006.10.14確認。毎年，秋，この森に山から下りて来ると。
ハシボソガラス　2000.2.11　初認。以後常在。
哺乳綱　翼手目
ヒナコウモリ科
＊イエコウモリ　1980 →復活し，1991→CC。●
食肉目
イヌ科
タヌキ　c 1996→夜間，住宅地路上でしばしば目撃。c 2000頃から見えず。未撮影。
アザラシ科
＊＊アゴヒゲアザラシ　2002.8.27　1頭，鶴見川河口から8㌔付近，東急東横線綱島駅近くで目撃。同年8月7日に多摩川で初認された“タマちゃん”だった。

表２　横浜・篠原付近の野生植物相
Table2　A list of wild plants in Shinohara and adjacent area，Yokohama.

◇前報（慶應義塾大学日吉紀要・自然科学。Nos. 17＆18, 1995）の後，筆者自身が出会い，同定し得た種名表。伝聞は採用せず。
◇＊　を付した種は，前報に記した種だが，追記の必要の生じたもの。
◇＊＊　常観察域に隣る地域での確認だが，加うべきものと考えたもの。
◇年月日を記した種は，その日にだけ出会えたもの。
◇略語解：　c　約。　CC　多い。　C　普通。　R　稀。　RR　極めて稀。
◇特記なければ，すべて，生態写真の撮影すみ。●：本報文にカラー写真添付。
◇上記のうち，地域内の野生植物として，新たに同定された種数。
Lichen, Fungi & Fern 4, Monocotyledon 9, Dicotyledon 60

地衣植物門
ウメノキゴケ　c 1955 →絶滅。
真菌植物門　担子菌綱　ハラタケ目
ヒトヨタケ科
シロコナカブリ　R
腹菌目
スッポンタケ科
ツマミタケ　1997.5.28
維管束植物門　羊歯綱
シシガシラ科
コモチシダ　R
単子葉植物綱
ガマ科
ヒメガマ　菊名池。c 2004 刈り採られ全滅。
イネ科
＊ムラサキエノコロ　R　エノコログサの亜種だが，穂が紫黒。
モウソウチク　CC　1736 中国から渡来，急速に栽培が拡大した。戦前の竹林は，よく管理され，竹林からの孟宗竹（江南竹）の逸出・野生化は稀だったが，1990年代初頭頃から，逸出が顕著になり，関東以西の平野部の雑木林は，放置されて，蔓延する本種に被い尽くされ，里山は，竹また竹の単調で貧相な景観に一変しつつある。
ツユクサ科
ヤブミョウガ　R
トキワツユクサ　CC　c 1998 →帰化，越冬。
ユリ科
オオバジャノヒゲ　2006.10.10 唯一の群落，開発で全滅。
タカサゴユリ　CC　c 1996→栽培品逸出・野生化。
ホソバオオアマナ　C　1997→帰化。
ハタケニラ　C　c 1998→帰化。
＊＊ウバユリ　慶應義塾・日吉キャンパスの林床に多い。未撮影。
ヒガンバナ科
＊＊キツネノカミソリ　慶應義塾・日吉キャンパスの林床に多。未撮影。
アヤメ科
ルリニワゼキショウ　R　c 2000 →帰化。
双子葉植物綱
センリョウ科
＊ヒトリシズカ　雑木林の消滅で，2006年現在ほぼ絶滅。
＊フタリシズカ　雑木林の消滅で，2006年現在ほぼ絶滅。
ヤナギ科
ジャヤナギorカワヤナギ　新横浜駅東南 c 300㍍の溝の西岸近く，10㍍近い大木として，４～５本立ち，新幹線下りプラットホームから，春の，この上なく美しい，いわゆるwillow greenの黄緑，秋の美しい黄葉が，見られたが，次第に伐られ，2004.1.3には最後の１本になり，c 2006年には，それも伐られ，絶滅。花による同定を試みようとしていたが，果たせず。
＊イヌコリヤナギ　荒地の激減で，c 1996 →絶滅。
カバノキ科
＊ハンノキ　c 1997 →開発で絶滅。
イラクサ科
イラクサ　RR　未撮影。
ヤブマオ　R　未撮影。
ヤドリギ科
ヤドリギ　c 1998年，宿主の木伐られ絶滅。しかし 2006.4.17，別の欅に着生を発見。
ウマノスズクサ科
＊ウマノスズクサ　1993年　当時の観察域で唯一自生の土手が，擁壁に代えられ絶滅。2002年別の自生土手を発見したが，2005.8.26　この土手も擁壁に代えられ絶滅。
タデ科
シャクチリソバ　C　c 1999→帰化。
ボントクタデ　RR
ツルドクダミ　R　c 1996→帰化。
アカザ科
コアカザ　C
ツルナ科
＊サンジバナ（ハゼラン）　CC　c 1987→栽培品逸出・野生化。2006年，午後３時頃開花，約３時間で凋み，再びは開かぬのを見た。
ナデシコ科
＊ミミナグサ　c 1999→ほとんど

絶滅状態。オランダミミナグサとの競争に敗れた？
ヌカイトナデシコ　2001.8.9 自宅庭に1株，以後再見せず。帰化。
ノハラナデシコ　2005.6.13 開花1株を，新横浜駅西c 1㎡の大きな土手で発見。翌年以降は見ず。帰化。●
＊カワラナデシコ　c 1969→絶滅状態にあったが，1997.10.11 近所の人家の土手に1株が咲いているのを発見。しかし，同年10.16には，抜き去られ，再絶滅。

キンポウゲ科
セリバヒエンソウ　R　2001→帰化。

ケシ科
ナガミヒナゲシ　CC 1995.5.24→帰化。2000→急増。
キケマン　RR

アブラナ科
ルーコラ（ロケット，キバナスズシロ）　2006.3.17　舗装の隙間に繁茂。帰化。
カラクサガラシ　C　c 1995→帰化。
ハルザキヤマガラシ　2001.4.7 自宅庭に1株，以後再見せず。帰化。
カキネガラシ　C　c 2000→帰化。
ミチタネツケ　CC　c 2000→帰化。
＊タネツケバナ　R　やや湿った地に多かったが，c 2000から激減。ミチタネツケとの競争に敗れたのか，あるいは畦道，適度の湿りのある土手などの減少によろう。

ベンケイソウ科
ツルマンネングサ　R

ユキノシタ科
チダケサシ　RR

バラ科
ニガイチゴ　1980.4.22　未撮影。
＊ヒロハノカワラサイコ　RR 唯一の自生土手で2006年に絶滅の気配。
＊ワレモコウ　RR　観察域内2箇所のみの土手のうち一箇所が2006.10.10宅地化で失われ，2006年末現在，一箇所に5株ほど残るのみ。
コゴメウツギ　RR　地域唯一の自生1株が，宅地開発による土手の消滅で2006.10.10絶滅。慶應義塾・日吉キャンパスには，多数健在。

マメ科
アレチヌスビトハギ　C 2003.10.13 発見。帰化。
＊ヌスビトハギ　2006年現在，ほとんど絶滅状態。
＊ナンテンハギ（アズキナ）　土手の消滅で，2006年現在，ほとんど絶滅状態。

フウロソウ科
ツノミオランダフウロ　CC 2001.5.5　開花株で初認，帰化。

ミカン科
カラスザンショウ　観察域に残っていた雑木林の林縁にあった1本が，2006年の夏，その林が宅地化され絶滅。未撮影。

ヒメハギ科
＊ヒメハギ　1991年にいったん絶滅したが，1996年，同じ人家の土手で復活。●

ミツバウツギ科
＊ゴンズイ　2006年の夏には，ほとんど絶滅状態。
＊＊ミツバウツギ　慶應義塾・日吉キャンパスの林に多い。未撮影。

クロウメモドキ科
＊クマヤナギ　2006年の夏には，ほとんど絶滅状態。

アオイ科
イチビ　1996→帰化。

キブシ科
＊キブシ　RR　2001.3.27　再発見。

スミレ科
マルバスミレ　1996.4.9　自宅庭に咲く1株発見。翌年以後再見せず。

アカバナ科
ツキミソウ　RR　1996→栽培品逸出・野生化を初認。
ユウゲショウ　C　1996→栽培品逸出・野生化を初認。

セリ科
ヤブジラミ　CC
オヤブジラミ　CC
シシウド　RR
アシタバ　R　1996→栽培品逸出・野生化を初認。未撮影。

ヤブコウジ科
＊ヤブコウジ　雑木林の激減で，2006年現在，ほぼ絶滅。

サクラソウ科
ピンパネル　2001.6.16　帰化を初認。
＊オカトラノヲ　RR　2006年現在，ほとんど絶滅状態。

リンドウ科
＊コケリンドウ　RR　唯一の自生土手で2006年に絶滅の気配。2007.3.9開花1株が残る。●

フジウツギ科
アイナエ　RR　自生する人家の土手が地域に一箇所のみ。

ヒルガオ科
マメアサガオ　R　1996.10.5 開花株発見，帰化を初認。
セイヨウヒルガオ（ヒメヒルガオ）　C　1984.6.7 開花株発見，帰化を初認。

ムラサキ科
コンフリー　C　栽培品逸出→帰化。

クマツヅラ科
ヤナギハナガサ　C　c 2001→帰化。
＊＊アレチハナガサ　綱島付近の鶴見川縁に群生する。未撮影。

シソ科
マルバハッカ　CC　c 2000→帰化。
イヌゴマ　1999.7.21　開花1株を発見。未撮影。

ナス科
ワルナスビ　CC　1996.6.30 →帰化初認。
オオセンナリ　1996.9.8　更地に1株咲く。翌年は宅地となり絶滅。
オオイヌホウヅキ　CC　c 2003→帰化。冬によく咲く。

ゴマノハグサ科
ツタバウンラン　C　c 1996→帰化。
ムシクサ　C

ハマウツボ科
＊ナンバンギセル　2006年現在，ほとんど絶滅状態。

ハエドクソウ科
＊ハエドクソウ　2006年現在，ほとんど絶滅状態。

アカネ科
カワラマツバ　R　2005.6.3 初認。

オミナエシ科
＊オトコエシ　2006年現在，ほとんど絶滅状態。未撮影。

キキョウ科
＊ツリガネニンジン（トトキ）

2006.10.10　自生が明らかだった最後の土手が，宅地化され，観察域では絶滅。

キク科

イヌカミツレ　2000.4.23　栽培品逸出・野生化を初認。

マメカミツレ　c 1995→帰化。

＊ヒヨドリバナ　2006年現在，ほとんど絶滅状態。

＊ヤクシソウ　自生が明らかだった最後の土手で，咲き始めた１株が，2006. 10.26に抜き去られ，絶滅。

＊キンパイタウコギ　2006年現在，ほぼ絶滅。

＊アキノキリンソウ　2006.10.10　自生が明らかだった最後の土手が，宅地化され，観察域では絶滅。

＊キツネアザミ　2006年現在，ほぼ絶滅。

セイヨウオニアザミ（いわゆるアメリカオニアザミ）　CC　2001.4.23　帰化初認。

＊＊シロヨメナ（ヤマシロギク）慶應義塾・日吉キャンパスの林縁には多い。未撮影。

＊ヨメナ　畦道の激減など，適湿の地が失われ　c 1990→絶滅。

オオキンケイギク　C　c 1966→野生化。

ノハラナデシコ，花径約１㌢，草丈約30㌢。2005.6.13.

コケリンドウ。花径約９㍉，草丈約３㌢。2005.4.14.

ヒメハギ　花径１㌢弱。草丈10㌢強。匍匐性。2006.5.1

表３　横浜・篠原付近の１年生草花と露地越冬栽培植物
Table 3　A list of Outdoor Wintering Horticultural Herbs and Arbores in Shinohara and adjacent area, Yokohama.

◇前報（慶應義塾大学日吉紀要・自然科学。Nrs. 17＆18, 1995）の後，筆者自身が目撃し，同定し得た種名表。
◇＊を付した種は，前報に記した種だが，追記の必要の生じたもの。
◇略語解：　c　約。　CC　多い。　C　普通。　R　稀。　RR　極めて稀。
◇特記なければ，生態写真の撮影すみ。
◇地域での樹姿が，草本様のものは，木本であっても，草花の部に入れた。
◇外観が母種と著しく異なる園芸変種（cultivar）には，頭に cv を付した。
◇　上記のうち，調査域の栽培植物として，新たに同定された種数。

３－１　庭木　Conifer 2, Dicotyledon 70
３－２　草花　Monocotyledon 20, Dicotyledon 44
３－３　作物　Monocotyledon 1, Dicotyledon 2

3−1　庭木
維管束植物門　針葉樹綱
マツ科
＊モミ　R　活着を　1977→と修正。
ハイビャクシン　R
ハイネズ　RR
双子葉綱
ブナ科
cv ナラガシワ　RR　未撮影。
ニレ科
cv コガネニレ　R
クワ料
イタビカズラ　C
オオイタビカズラ　R
オシロイバナ科
＊ブーゲンヴィレア　c 2003→露地越冬。2005-06の冬の稀な低温により地上部枯死したが，2006年春，蘇生。
モクレン科
キモクレン　RR
オオヤマレンゲ　RR
ユリノキ（ハンテンボク，チューリップツリー）　CC　街路樹。
ズイナ科
コバノズイナ（アメリカズイナ）　C
スグリ　RR　未撮影。
ユキノシタ料
カシワバアジサイ　C　c 2003→栽培急増。
イワガラミ　RR
ガクウツギ　RR
マンサク料
マンサク　RR
チュウカマンサク　C
トキワマンサク　RR
ベニバナトキワマンサク　CC　c 2000→栽培急増。前種の亜種？
バラ料
リキュウバイ　RR
ホザキシモツケ　2006.6.9　1樹開花を確認。北方系。
ナニワイバラ　R
モッコウバラ　CC　c 1998→栽培急増。
cv アカバナサンザシ　RR
カマツカ　RR　近隣に野生多いが，栽培もされる。
＊ザイフリボク　C　おそらく洋種 Amelanchier alnifolia も栽培されている。
マメ料
ハナセンナ（Cassia corymbosa）　CC　2000.9.4　開花初認，c 2004→栽培急増。南方系。
ハネセンナ（C. alata）　RR　2001.9.6　開花１樹を目撃。花にポップコーンの香り。2000　露地越冬。熱帯系。
フサアカシア　R
コマツナギ　RR　かつて近隣に野生していたが，それらは早くに絶滅。
イヌエンジュ　RR　1樹，2004.10.7　目撃確認。2006年には健在。
エンジュ　CC　街路樹として。
キングサリ　RR　2001.5.13　開花確認。地域に2006年現在２樹健在。北方系。
Hardenbergia violacea　C　1995→露地越冬。c 2000→栽培急増。白花も。
マルハデイコ　1999.7.1　開花確認，2000年 c 5月伐採され，絶えた。
アマ科
キバナアマ　RR　2007.3.4　満開。１株のみ生育。南方種。
ミカン科
ヘンルーダ　R　2004.5.1　初認。
ボロニア・ピンナータ　R　c 2006→
ニシキギ科
ツルウメモドキ　R　近隣に野生多いが栽植も。
ツルマサキ　RR　近隣に野生あるが栽植も。
ムクロジ科
ムクロジ　RR　2007.1.5
モクゲンジ　R　2000.7.6
トチノキ料
＊マロニエ　を　ベニバナトチと訂正。C　c 2002→栽培急増。
ホルトノキ科
ホルトノキ　R　街路樹として　c 1990→
シナノキ料

シナノキ　RR　未撮影。
オオバボダイジュ　RR　2001.6.12　1樹確認。2006年現在健在。
アオイ科
ヤノネボンテンカ（Pavonia hastata）R　2000.5.11　初認。野生化傾向。
ウキツリボク　CC　c 1999→栽培急増。
Abutilon属の諸園芸変種　CC　c 1999→栽培急増。
シソ科
Phlomis fruticosa　RR　2005.4.27　開花初認。1株のみ。
ローズマリ　C　c 1990→露地越冬。
ツバキ科
イジュ　RR　c 2004→南方種。
オクナ科
オクナ・セルラータ（ミッキーマウス・プラント）　RR
オトギリソウ科
コボウズオトギリ　R　c 2005→栽培漸増
イイギリ科
イイギリ　RR
グミ科
オオバグミ（マルバグミ）　RR　未撮影。
ノボタン科
シコンノボタン　C　c 2001→露地越冬。
フトモモ科
＊レプトスペルムム・スコパリウム（ジュートゼー・ミュルテ）
＊ミルテ　ミュルテと訂正。
ウコギ科
＊シェフェレア・アルボリコラ　c 2001→露地越冬。
ツツジ科
＊アメリカイワナンテン　c 1996→露地越冬。
ジャノメエリカ　R
ヤブコウジ科
ツルコウジ　R
イソマツ科
ルリマツリ（Plumpago auriculata）　CC　c 1994→露地越冬　c 2002→栽培急増。白花も。熱帯性。
ブータンルリマツリ　RR　2000-2001 の冬，地上部枯死。翌春復活。
モクセイ科
マツリカ　RR　2006越冬確認。南方種。
ヒトツバタゴ　R　2001.5.2　満開株確認。
マルバアオダモ　R　2004.10.7　初認。
シマトネリコ（タイワンシオジ）または近似種　C　c 2002→栽植急増，南方系。
マチン科
カロナイナ・イェロー・ジャスミン　C　c 1995→露地越冬。花に香なし。
キョウチクトウ科
マンデヴィラ・ボィヴィエンシス　C　c 2004→露地越冬。
クマツヅラ科
Duranta repens（ハリマツリ）　CC　c 1995→露地越冬し，栽培急増。熱帯性。
Clerodendrum ugandense　RR　c 1997→露地越冬。
＊ランタナ　C　c 1988→露地越冬。c 1995→栽培急増。2005-06の冬の稀な低温により地上部枯死したが，2006年春，蘇生。
＊コバノランタナ　CC　c 1987→露地越冬。ランタナに酷似するが，耐寒性大きく，2005-06の冬の稀な低温により，ダメージを受けながらも，生き延びた。ランタナの花が，暖色系と白に限られるのにコバノランタナの花の色は，株により藤色又は白。
ナス科
ルリヤナギ　RR　1997→露地越冬。
ツルハナナス　CC　2003→露地越冬し，栽培急増。日本のヤマホロシに近いが，ブラジル原産の南方種。
キツネノマゴ科
＊コエビソウ　CC　c 1995→栽培急増。
サンゴバナ　RR
ノウゼンカズラ科
ヒメノウゼンカズラ　C　c 1997→露地越冬。
ソケイノウゼン　R　花に香なし。
ツリガネカズラ　RR　c 1997→露地越冬。花に強いカレーの匂い。
スイカズラ科
オオベニウツギ　C
アカネ科
コンロンカ　RR　c 2005→露地越冬。
キク科
Euryopus virgineus（Golden cracker）　C　1998 初認。
＊E.Pectinatus　CC　c 1993→と追記。一重黄花。

3−2　草花
単子葉綱
オモダカ科
ヘラオモダカ　R
ツユクサ科
cv Tradescantia fluminensis cv Laenekenensis　R　c 1995→越冬初認。秋冬に新芽紅染。
Tradesantia sillamontana　RR　c 1995→越冬初認。葉に白毛。桃色花。
ミズアオイ科
＊＊ホテイアオイ c 2002→慶應義塾・日吉第２校舎テラスで開花し，越冬も。
ユリ科
ユウスゲ　RR
アロエ・ヴェラ　R　1997→露地越冬。
アルストロメリア　C　1998→
コオニユリ　RR　未撮影。
タカサゴユリ　C　c 1999→野生化激増。
カサブランカ　R　c 1999→未撮影。
＊バイモ　C　c 1998→野生化傾向。
Gloriosa superba　RR　2003年６月　越冬開花初認。
ホソバオオアマナ　C　c 2004　野生化。
＊スキラ・ヒスパニカ　誤植訂正。
スキラ・シビリカ　RR
Alium giganteum　R
cv A. schoenoprasum（Chive）　RR
アスパラグス・マコワニー　RR　1994→露地越冬。俗称スプレンゲリ。
ヒガンバナ科
＊ハマユウ　RR　1994→露地越冬。
ネリネ　R
キルタンツス　R
アヤメ科
ラペイルージア（アノマテカ）　C　c 2004→野生化顕著。
ワトソニア　R
ルリニワゼキショウ　R　c 1995→野生化傾向。
ショウガ科

ベニバナシュクシャ
（Hedychium cv ）　RR
c 2006→野生化傾向。
クルクマ・ペティオラタ　R
c 2003 →

双子葉綱

ヒユ科
千日小坊（センニチコボウ，Alternanthera porrigens）　RR
c 2005→
ヒモゲイトウ　RR
ツルノゲイトウ　RR

ヤマゴボウ科
ジュズサンゴ（ルージュ・プラント）RR　2006→

スベリヒユ科
＊サンジバナ（ハゼラン）
c 1987→野生化。

サボテン科
カニハサボテン　c 1996→露地越冬。

ハス科
ハス　C　c 2002→菊名池に激増。

スイレン科
コウホネ　C　c 2002→菊名池。

キンポウゲ科
キンポウゲ　RR

ケシ科
Papaver commutatum　RR
オニゲシに酷似する。より小型，花弁の底が黒。

アブラナ科
イベリス　C　c 2003→栽培急増。
＊ニオイアラセイトウ　を　サイベリアン・ウォールフラワーと修正。
アラセイトウ（ストック）
CC　1999→矮性品種（花の香り微弱）の栽培急増。

ベンケイソウ科
＊クラセラ・ポルツラケア（成金木）　C　c 1999→露地越冬。
＊イワレンゲ　を　ツメレンゲと訂正。

マメ科
シュッコンスウィートピー　C
センダイハギ　R.
ムラサキセンダイハギ　RR
1997.5.25　開花株確認。

アマ科
シュッコンアマ　RR
2001.4.26　宿根初認。

カタバミ科
オクサリス・ウェルシコール
R　c 2006→つぼみが紅白の捻りん坊。
オクサリス・レグネリ（紫の舞）　C
オクサリス・テトラフィラ
（Iron cross）　C

トウダイグサ科
ショウジョウソウ　R　c.1999
→野生化傾向。
ハツユキソウ　C　c 1997→栽培急増。

アオイ科
チョウロソウ（ギンセンカ，Hibiscus trionum）RR
2000.8.22　初認。

アカバナ科
ハクチョウソウ　C　1997→栽培急増。

サクラソウ科
プリムラ・プラエニテンス　R
c 2006→

ガガイモ科
ルリトウワタ（Oxypetalum caeruleum）　RR　2000→露地越冬。
＊トウワタ　を　ヤナギトウワタ（Asclepias tuberose）　C と改める。

ハナシノブ科
ツルハナシノブ（Phlox divaricata）　RR　2000→

オミナエシ科
オミナエシ　R　近隣の野生は，c 1955　絶えた。
ベニカノコソウ　RR

シソ科
cv マルバハッカ（Mentha suaveolens, Applemint）
c 2000→大いに野生化。
Salvia leucantha　C　2001 初認。

ナス科
ツノナス（Foxface）RR
＊ペチュニア　CC　cv サフィニア　1989　サントリーが発売，たちまち大流行。
オオセンナリ　RR

ゴマノハグサ科
cv Verbascum　R　c 2002→栽培始る。

アカネ科
Pentas lanceolata　CC
c 1996→栽培急増。

キツネノマゴ科
クロサンドラ（Crossandra infundibuliformis）　R
2000→耐寒性？

キキョウ科
cv Lobelia speciosa　RR　1997→露地越冬。
Isotoma axillares　C　c 1996
→急増。

キク科
ユウゼンギク（Aster novi-belgii）　RR
ベニバナ　RR
アサギリソウ　C　c 1998→急増。
ヤナギバヒマワリ（Helianthus salicifolius）　C　c 2002
→
ホソバヒャクニチソウ（Zinnia angustifolia）　CC
c 1996→急増。
Senecio bicolor　CC　銀白葉，黄花。
ハナカンザシ（Helipterum roseumまたは近似種）　R　c 2005→
Helichrysum petiolatum　又は　近似種　CC　c 1997
→急増。銀白葉，匍匐性。花は小さく地味。
カモミール（カミツレ）　CC
c 1998→急増。野生化傾向強し。
フジバカマ　R　花はほとんど匂わぬが，干した葉は，永く佳香を保つ。かつて地域に自生を見たことなし。
Melampodium paludosum
CC　c 1997→急増。

3−3　作物

単子葉綱

ショウガ科
ウコン（Curcuma domestica）
C　c 2000→栽培急増。

双子葉綱

アブラナ科
＊クレソン　RR　撮影済み。

マメ科
ナタマメ　RR　撮影済み。
＊フジマメ　戦後まもなく栽培途絶。未撮影。

セリ科
＊クレソンを誤り入れた。
ウイキョウ（フェネル）　RR
c 1997 →

ゴマ科
＊ゴマ　RR　c 1960 栽培途絶したが，c 2006→わずかに栽培復活。撮影済み。

ウリ科
＊レイシ（苦瓜，ゴーヤ）　C
c 2003→栽培急増。

キク科
＊スイゼンジナ　RR　2006年現在，栽培途絶。未撮影。

謝辞

図鑑類および市販の啓蒙書の執筆，編集，出版に当られた方々に，深く感謝を捧げたい。これらが無ければ，地域動植物の同定は，一歩も進まなかった。これらが，相当程度充実している日本という国にいればこそ，この報告書は，作成できた。Ms.Mami O. McCraw, Univ.of New MexicoとMr. Nicholas E. Mendoza, Attorney at Law は，英文校訂の労をとって下さり，深謝する。倉嶋厚先生（気象），深津正先生（植物名語源。2006年，惜しくも長逝された），磯野直秀慶應義塾名誉教授（博物誌）の各先生からは，専門的なご教示を頂戴し，ありがたいことだった。慶應義塾大学生物学教室の秋山豊子，長沖暁子，福山欣司の３先生の，ご助力と，お導きなしには，本報告書は陽の目を見ることは，決して無かった。深い感謝の念を銘記する。

文献

1）磯野直秀（1995）「東莠南畝讖　18世紀前半の動植物図譜」慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 18, 61–68.

2）――――（2002）『日本博物誌年表』平凡社，944pp.

3）神奈川県植物誌調査会（2001）『神奈川県植物誌』1580pp.

4）黒田長禮（1906）「珍鳥ヲガハコマドリ」東京動物学会・動物学雑誌 28, 508–510.

5）慶應義塾大学・日吉自然調査グループ（1991）「慶應義塾日吉キャンパス域の自然調査報告」114pp.

6）日吉の森に学ぶ会（1995.5.1–2006.11.8）「日吉の森ニュース・Nos.1–100」200pp.

7）菅野　徹・梅田　孝「フチドリベッコウトンボを日本本土（神奈川県）で初確認」（2006）TOMBO. 48（1/4）–35.

8）菅野　徹（1982）「会下谷（えげやと）の雑木林の生物相とその季節変化」横浜市公害研究所資料　43, 1–144.

9）――――（1995）「横浜級市内の１小雑木林の生物相変遷（1942–1994）」女子美術大学紀要 25, 155–174.

10）――――（1995）「横浜・会下谷（えげやと）の生物相（1942–1994）」慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 17, 82–100.

12）――――（1995）「横浜・篠原の露地栽培植物相（1942–1994）と気温推移（1979–1994）慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 18, 69-93.

13）――――（1994）「横浜の町なかの二つの水辺の動物相・その１・弁天橋」獨協大学教養諸学 29–1, 24–43.

14）――――（1995）「横浜の町なかの二つの水辺の動物相・その２・菊名池」獨協大学教養諸学 29–2, 22–48.